【第50回全国大会記念講演概要】

表現はリサイクルする
－模倣と表現－

清水　良典

表現とは自己実現のことである。それは高校生でも作家でも同じであり、自分にしか書けないことを書くという点で、そこにはオリジナリティがあることが前提とされる。しかしその一方で、言語表現には不可避的に過去の表現の模倣がつきまとう。そして、その模倣の方法やレベルによって、オリジナリティが生かされもすれば損なわれもする。

模倣のあり方は次の三つに分類される。①自分の独創と思い込んで二番煎じや紋切り型に陥ってしまう無知な模倣、②他の作品をなぞって取り込み、その形跡をたやすく見破られてしまう下手な模倣、③もとの作品を土台にして別個の作品に仕上げてしまう巧みな模倣。このうち、①や②の模倣は「盗作・盗用・パクリ」として非難されるものであるが、③は芸術的な創作活動において、むしろ積極的に行われてきたものである。

日本の近代文学にも、その顕著な例はいくつも認められる。たとえば、ポール・モーランの「夜ひらく（土耳古の夜）」を参考にした横光利一の「頭ならびに腹」の一節、吉田健一の「金沢」の文体を誇張した蓮見重彦の「表層批評宣言」、カート・ヴォネガット・Jrの「スローターハウス5」をふまえた村上春樹の「風の歌を聴け」、同じくカート・ヴォネガット・Jrの「スラップスティック」を下敷きにした高橋源一郎の「さようなら、ギャングたち」などのように。

これらの例は、③の模倣によってこそ、あらたな自己表現のオリジナリティが獲得されたのであり、とくに外国語の文章・文体の模倣が日本語表現としての新たな境地を生み出してきたといえる。その意味で、模倣つまり表現のリサイクルはそれを通しての差異においてオリジナリティが支えられてきたのである。

ところが、近年では、模倣という方法の進化・変質にともない、オリジナリティという従来の価値観そのものが揺らぎつつある。サンプリング、カットアップ、リミックスといった、クラブ音楽からもたらされた加工技術は、模倣におけるオリジナルとコピーという関係を相対化あるいは無自覚化してしまったからである。今後、自己実現としての言語表現をより豊かにしていく可能性があるとすれば、それはひとえに模倣の自覚と巧みさにかかっている。

なお詳しくは、『あらゆる小説は模倣である。』（幻冬舎新書、2012年7月）を参照されたい。　　（愛知淑徳大学）